

【原著論文】

初等科中等科音楽教育におけるベル・カント発声法に基づく一考察
 ——イタリアの音楽教育研究視察から——

A Study on the Educational Consideration of Bell Kant Singing Method
 in Elementary School Music Education:
 From a Research Tour of Italian Music Education

瀧明知恵子* 木下紀章**

TAKIAKI, Chieko* KINOSHITA, Noriaki**

要旨

2014年より4年間、ベル・カント唱法の発祥地であるイタリアの音楽科教育について調査研究し、具体的には歌唱指導に注目した。イタリアにおける音楽家教育の在り方を踏まえ、ベル・カント唱法の変遷と原理を明らかにし、実地調査することができた内容を含め、イタリアで引き継がれてきた呼吸法・発声法における示唆を提示する。日本においても実践可能な、学校教育における歌唱メソッドの提案につながるのではないかと考える。

キーワード：音楽科教育・歌唱指導・ベル・カント唱法・系統的な指導法

1. 研究の所在と目的

2020年度から、小中高の新学習指導要領が順次全面実施され、知識と技能だけでなく、思考力・判断力・表現力の育成を掲げ、「主体的・対話的で深い学び」による授業が進められる。また、「知識偏重型」から、主体性・協働性なども評価する「多面的総合型」へ、大学入試が大きく変わる。

人が人となるための基礎基本としての芸術教育が、独立した必修教科であり続けた意義を再確認し、音楽科改善の視点から、さらなる充実をめざさねばならない時期である。音楽は長い範囲で人生を充実させるものである。音楽の世界を幅広く考えていくと、音楽教育は、新しい時代の協調的な学習やコミュニケーション能力を養うことなどに適していると言える。

筆者はこれまで、イタリアの音楽科教育について調査研究してきている。⁽¹⁾ イタリアは歴史的に西欧の音楽文化の中心であり、創造性や個性的な能力を重視している国であるが、他の先進国に比べ音楽科教育については、研究が少ないのである。例えば「イタリアの音楽科教育の変遷」(1894)や、1923年のプログラムと小学校歌唱指導者についての研究を行った大野内 愛、「学校外教育の位置付け」を扱った高橋春菜(2014)である。⁽²⁾

イタリアはオペラ誕生の地であり、ロッシーニ、ヴェルディ、プッチーニなど大作曲家を多数生み出した国である。専門教育機関としての音楽院などが充実しており、諸国の音楽を志す人たちが留学を希望す

る地である。しっかりとしたアートの伝統が国の基盤を支えているイタリアの学校音楽科教育について研究を深め、日本の音楽科教育への示唆を導き出したい。

具体的には歌唱活動をはじめとした学校音楽科教育に注目し、日本で根付いてきた教育課程を、文化遺産の豊富なイタリアの教育から検討することで、より良い音楽科教育を創造する機会としていきたいと考えている。

中でも歌唱は、人間に等しく与えられた声帯という楽器で奏でる。人間の声帯は素晴らしい楽器である。美しく鳴らすための健康管理から楽器作りまでを正しく行えば、思うような音楽が奏でられるのである。

限られた授業時間の中で、日本の歌唱や合唱指導は、活発に行われているが呼吸法や発声法の基本的な指導法については未だ確立されていないとは言えない。

喉に無理なく低音から高音まで、気持ちよくのびやかに歌えるベル・カント唱法は身体に余分な力が入っていない状態で腹式呼吸を行い、自然の生理に逆らわない発声法である。すべての人間が生まれつき持っている能力を生かし、系統的に開発していくことは、これまでの歌唱・合唱教育をより豊かにするものであるとともに、声を発する様々な表現活動の基礎づくりにもつながるのである。

そこでベル・カント唱法の発祥地であるイタリアの、古くから引き継がれてきた歌唱指導法や創意工夫に学び、発達段階に応じ、正しく表現する方法である呼吸法や発声法など基礎技能の教育方法の検証を深めてきた。

* 奈良学園大学 (Nara-Gakuen University)

** 京都市立芸術大学 (Kyoto City University of Arts)

瀧明はイタリア大使館から紹介を受け、2014年から2017年に渡って、ローマの幼・小・中学校の一体型学校であるピステッリ校での授業参観・交流授業、およびボローニャ大学、マルティーニ音楽院での研究調査・研究交流を行ってきた。歌唱・合唱をはじめとした音楽科教育に長年たずさわって、学校教育における音楽活動の有用性を実感してきた中で、歴史的に長く西欧の音楽文化の中心となっていたイタリアの学校教育との研究交流は大変意義深い研究活動となっている。児童・生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成に欠かせない。音楽は一生の友となり、知れば知るほど楽しみが深くなるなど、生涯学習につながっていくのである。

本論文では歌唱指導の系統性に視点をおいて、音楽教育研究視察から、その特色を解明し、引き継がれてきた指導法について示唆を得る。イタリアの教育で大切にされていること、日本の教育で大切にされていることそれぞれを尊重しながら、日本の音楽教育の一つの道しるべにすることを目的とする。

2. イタリアの音楽科教育

(1) 音楽科教育の変遷

イタリアの目指す教育の方向性の移り変わりを概観することにより、イタリアの音楽科教育の特色を探る。

イタリアでは1859年、教育に関するプログラム（日本でいう学習指導要領）のもと義務教育が誕生した。⁽³⁾この時期には教科として音楽科はふくまれておらず、1888年にはじめて小学校に「追加訓練」の「合唱」として登場している。

参考までに、日本では学制が1872年に制定され、その後しばらくの間、準備期間ととなったものの、1911年には「尋常小学校唱歌」が発行された。わずか約50年前に音楽文化の歴史が深いイタリアの音楽科教育が、スタートしたということは意外なことであった。すべての子供たちに、公教育で音楽科教育がなされた歴史は、割合浅かったのである。

1894年に「歌唱」としてプログラムの教科に含まれるようになった。中学校では1963年に、教科として「音楽科」が設置された。

1985年では、教科名は「音と音楽への教育」であり「聴く」活動が重要視される。

2004年では「個に応じた学習レベルのための国のプログラム」として暫定的な規定で、教科名は「音楽」である。

2007年では、「幼児学校および第1課程の教育カリキュラムにおけるプログラム」であり、小学校から中学校まで系統的にカリキュラムを提示している。音楽は生活に密着したコミュニケーションツールとして考えられた。これまでの「民主的な共生」と「参加」という語句が無くなり、「一人一人の中心性」「生徒のプロフィール」

としている。すなわち個人の学びの成果を計る基準である。他に、領域や価値項目が示されている。

第1章第1節に今日の学校が置かれた状況と学校の役割を「学校での学びは子どもや若者の人間形成に関わる多くの経験のうちの一つに過ぎず、また特定のコンピテンシーを獲得するのにしばしば学校教育は必要ない。」と端的に示している。イタリアでは、学校教育は人間形成に関わる多くの経験の一つに過ぎない、と論じており、日本の学校教育の位置付けとは明らかに異なっている。

(2) 音楽科のカリキュラム

① 教科の理念・目標

イタリアでは日本の学習指導要領に相当するものとして、教育省による「幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針」（幼稚園、小学校、中学校）がある。

2012年版「国のカリキュラム指針」では、幼児学校および初等教育課程（かつての小学校・中学校）までを一括りに対象としており、グローバル化・EUの影響を受け、一般目的にキー・コンピテンシーをそのまま採用している。各学校はカリキュラム指針をベースに運営するが、それ以外に学校自身のカリキュラム（Piani di Offers Formative「育成提供プラン」：音楽、演劇、運動活動など含む）を製作することで、カリキュラムをより豊かにし、特徴を加えている。このカリキュラム指針を基盤とした教育がなされているが、学校の裁量の幅が大きくなっている。

イタリアのカリキュラム指針には、育成される基礎能力を明確に定義づけ、それを実践へと展開する一貫した理念が示されている。

音楽科の理念としては、以下のように記載されている。

音楽：

人間の経験の基礎であり普遍的要素を成す音楽は、協力性や社会性促進へのきっかけ、楽器知識の習得、創造性と共有能力の発揮、コミュニティに属する感覚の発展、さらには異なる文化間の相互作用にも適しており、象徴的な位置を占めている。

音楽教育の習得は、実技と理論から構成され、学校教育においては二つの側面を持つ。

- ・合唱や演奏など、音を用いた作品製作
- ・関連するイベント、現代や過去の作品を通じて、個人的、社会的、文化的意義の構成の意識的な享受を促す

歌唱、楽器演奏、創造的製作、聴くこと、理解や評論的熟考は、各々の音楽性の発展を促し、パーソナリティの感知-動力要素、認知要素、感情的-社会的要素の融合を助ける。また、困難を事前に防ぐことを可能にする精神身体的健康に貢献し、年齢によって変化する要求、希望、疑問、特徴に応じていく。特に、皆で音楽を学ぶという経験を通して、各自が楽譜を読み書きすることが可能になり、またその時に思っていた行動と思考をもとに即興で音楽を作ることができる。

（下線は筆者による。）

2012年9月版 教育省より一部抜粋 ⁽⁴⁾

さらに、カリキュラム指針に示された具体的な指導内容、何を教え、どういった学力を身につけさせるのかを知るために〈学習修得目標〉⁶⁾を見ていく必要がある。

初等学校5年修了時の学習修得目標においては、次のように示されている。

- ① 創作力と即興力を少しずつ伸ばすとともに、声、楽器、新しい音楽テクノロジーを創造的、意識的に使う
- ② イントネーション、表現、演出面に留意しながらグループや、一人で歌や楽曲を奏でる(多声音楽も含む)
- ③ 様々な分野やスタイルの音楽の機能面や芸術面を評価し、その文化、時代、背景を識別する
- ④ 様々な起源、ジャンルの音楽を構成する基本要素である音楽言語を識別し、分類する
- ⑤ 音楽記号を読み取り、楽曲の基本要素を表現する
- ⑥ マルチメディア(映画、テレビ、コンピュータ)における音楽や音の用途、役割、背景を読み取る

以上のような教科の理念・目標を提示しているが、イタリアの小学校では音楽は必修ではない。各学校の裁量に任されている。従って専門の資格を持つ者が必ずしもいるわけではなく、一般の教員が音楽も指導する。結果として各地域・学校により、差が生じているところである。

3. ベル・カント唱法とは

(1) ベル・カント唱法の成り立ち

ベル・カント唱法とはイタリア語で『美しい歌(belcanto)』という意味であり、イタリアの伝統的な歌唱法である。喉に無理なく低音から高音まで、気持ちよくなるびやかに歌える方法である。

ベルカントは15世紀末から18世紀にかけてイタリアで発達し、19世紀前半でほぼ完成の域に到達したと言われている。その頃に活躍したベッリーニ、ロッシーニ、ドニゼッティなどが作ったオペラを一般的にベルカントオペラというが、テクニックを駆使してアクロバティックな音形を滑らかに自然に表現するのである。

1900年代前半はまだ声楽のテクニックが確立されておらず、録音資料も限られて現存するSP録音などでしか確認することができないのであるが、エンリコ・カルーソーの声というのは今の時代においても強靱で素晴らしいベル・カントであり、聴いている人の心をつかんで離さない。戦後に現れたマリオ・デル・モナコは黄金のトランペットと称され未だ彼のような響きを再現するような歌手は存在しないとされる。

『西洋の音楽と社会③』の『オペラの誕生と教会音楽』では「初期バロックに確立されたすべての制度のうち、音楽史上最も大きい成果はイタリアのオペラであった。」と記されている。⁶⁾しかしながら、19世紀前半のイタリアのオペラの時代に栄え、今は衰退してしまっている。

その後イタリアのオペラはバロック・オペラや古典派

のオペラで確立された様々な形式が緩和され、互いに溶け合う傾向にあったと言える。

時代と共に、人々が求めるものは多種、多様で流行や伝統などを受けながら継承されているのである。時代が発達しSPからLPそしてカセットからCDそしてLD、MD、DVD、ブルーレイなど(モノラルからステレオさらにはデジタル)目まぐるしく音響分野が発達し、より多くの情報を拾えるようになった。しかしそれは演奏家の器を必ずしも大きくさせた、とは言えない状況が今日にある。

時代は変わりルチアーノ・パヴァロッチィが現れ3大テノールといわれる世界の人気テノールベスト3が一堂に会して野外劇場や、野外スタジアムでコンサートをするという催しが世界中で巻き起こりセンセーショナルなブームをおこした。

ベル・カント唱法については発声学の聖典と呼ばれる「singen」の著者フレデリック・フースラー⁷⁾をはじめコーネリウス・リード「ベル・カント唱法—その原理と実践」⁸⁾など様々な研究がみられる。

(2) ベル・カントの原理

ベル・カント唱法は下腹部を徐々に押し上げながら、横隔膜を上にあげていき、喉に無理なく低音から高音まで、気持ちよくなるびやかに歌える方法である。身体に余分な力が入っていない状態で腹式呼吸を行い、自然の生理に逆らわない発声法と言える。

ベル・カント唱法は別名、母音唱法とも呼ばれる。ロッシーニは「イタリアのもたらした最も美しい賜物の一つであるベル・カント」とも述べている。

18世紀にイタリアで完成されたベル・カント唱法は発声法の歴史におけるひとつの頂点とみなされている。フースラーは「美しく滑らかに結ばれた歌い方」と記し、また「たまたま著しく高められた美学的要求だけによって生じたのではなく、この理想的な歌声の概念は、同時に歌うためには発声器官で守られなければならない生理的法則と、きわめて正確に合致したのである。」⁹⁾と記している。呼吸法など中心とした現代の声楽発声法の訓練法とは大きく異なっている。低い音域、高い音域はそれぞれ独立したまま鍛えあげられ、その後両者の音色的な統一が図られる。結果として広い音域で無理のない発声となり、技巧的自由度が大きく消耗しないとされる。

ベル・カント唱法は別名、母音唱法とも呼ばれる。ドイツ語とイタリア語の発音の違いは、発声に大きな影響を与えている。ドイツ語では子音は母音と同じぐらい重要なものに対し、イタリア語の子音は軽く、すばやく発音し、母音の発音する場所は鼻腔で、喉の状態は母音によって変化させない。つまり母音が同じ音色、同じポジションで横につながり、まるで歌うように発音するのであ

る。その結果、イタリア語の歌を歌う時は大きなエネルギーを必要とせず、身体のバランスで歌うことができるのである。

日本のレガートは綺麗につながっているようであるが、彼等に言わせてみれば、我々日本人の感じるレガートはまだまだ甘く、彼等の求めるレガートは柔らかく、丸くまさにベル・カントなのである。そしてこのベル・カントのレガートを習得するべく歌うことを学ぶのである。

ベル・カント唱法を引き継ぎ、20世紀半ばウイーンのラヨシュ・サモシ教授によって開発された歌唱法、教授法として「Libero Canto」がある。⁽¹⁰⁾

先ず各人の持つ歌唱時の悪い癖を取り除く。そしてクラシックの声乐にありがちである「構える、支える、保持する、気張る、響きをあてる」といったことをしないで、ごく自然に楽な息のエネルギーで発声・発音していくのである。力を入れるのではなく、軽く明るい喉のメカニズムをトレーニングし、身体全体をゆるめ、身体の働きを自由にするによって、その人のもつ本来の声の特性と音楽を正しく出していくものである。

この方法は自然であるがために、自分のものにするのにはかなりの忍耐の期間が必要であるが、熟達すれば20世紀初頭に西欧で活躍した名歌手のように、優美で暖かく、音楽性に満ちた歌唱芸術が実現するのである。

サモシは、呼吸なしに声はなく、呼吸なしに歌唱はない。私たちの呼吸方法が歌唱方法を生じさせると説いている。呼吸方法自体が完全に私たちの身体的、感情的な状態の現れであると示している。また、緊張のパターンと呼吸をせき止めることや、力づくの強制パターンである息の抑止と強制は身体と呼吸の自然な機能を損なうと説き、声とは私たちが歌うという行為であり、息を吐いた結果動く空気の振動である。⁽¹¹⁾と提示している。

(3) イタリアのベルカント

本来イタリアのベルカントとは無理のない美しい発声という意味であるが、イタリアでもこのベルカントという言葉では多くの疑問や謎が存在するという事実がある。木下が7年間イタリアに学び、感得してきたことは、イタリア人にとってのベル・カントは、人それぞれの感性であり、必ずしも統一されたものではないということである。

例えば、声乐レッスンにおいて、指導者が「これがベル・カントだ」と言ったとする。そして生徒がその指導者が言うベル・カントを実践してみる、しかしそれはその指導者にとってのベル・カントであって、生徒が指導者の模倣をすることではないのである。出来たところで指導者の声になるわけではない。指導者の声になったところで、それはその指導者の模倣であって、ベル・カン

トでも何でもないとされてしまうのだ。生徒は指導者の模倣をすることではなく、自分の喉から発声される響きを自分の身体から良い状態で外に送り届けるということがベル・カントへの道のりの一歩であると解釈する。

ベル・カントを作るのは非常に時間と手間のかかる作業であり、今の時代において全てが短縮化、効率化された世の中で生み出すことは難しいというのが現状のようである。

4. イタリアの音楽教育実地調査

(1) 実地調査の概要

①訪問先 ピステッリ小学校

(幼・小・中学校の一体型学校)

Scuola Primaria "Ermenegildo Pistelli"

Monte Zebio 33, Roma

②訪問日・訪問目的

・第1回 2014年 9月

イタリア(ローマ)の小学校・中学校の音楽科教育について公教育ではどのように行われているのか。ピステリ校の概要を知るとともに、カリキュラム等、資料収集および、聴き取り調査する。

・第2回 2015年 9月

イタリア(ローマ)の小学校・中学校の音楽科教育について資料収集および、意識調査、聴き取り調査する。系列校である中学校も訪問し、小・中学校の歌唱指導に視点を置いた授業参観・交流授業を行う。

・第3回 2016年 9月

音楽科教育の活動を広げ、総合的な表現力の向上のために、イタリアの新しいカリキュラムとテアトロ表現教育による領域横断的学習(オペラプロジェクト等)について調査する。オペラプロジェクトの一環である授業参観、交流授業を実施する。

・第4回 2017年 9月

イタリア(ローマ)の小学校・中学校の音楽科教育についてカリキュラム等、資料収集および、意識調査、聴き取り調査する。また、呼吸法・発声法に注目し授業参観・交流授業を行う。

③主な対応者

・在イタリア大使館 一級書記官 西池万葉

一級書記官秘書グローリア・ドゥッチ(第1回・2回)

・学校長 Prof.ssa Brunella Maiolini(ブルネッラ・マイオリニ)(第1回~4回)

・小学校音楽教諭

Cristina D'Amico(クリスティーナ・ダミーコ)

(第1回~4回)

・その他、小学校5名、中学校2名の音楽教諭 A)

(2) 実践の概要

① ピステッリ小学校の教育状況

(Scuola Primaria "Ermenegildo Pistelli"Monte Zebio 33, Roma)

ピステッリ国立学校は、小学校 40 クラス、幼稚園 7 クラス、児童数計約 1.000 人から成り、敷地は離れているが、系列の中学校・高等学校もある総合学校である。隣の敷地には地域の中学校・高等学校があり学校の施設や設備を共有している。これは予算面での措置のようである。

初等学校では、週当たりの授業時間数には、24 時間、27 時間、30 時間、40 時間の 4 つの選択肢があり、入学手続き時に希望時間数を申請するようになっているが、おおむね 27 時間となっている。

1 クラスは 23 名～25 名である。校則や制服はなく、子供の自主性に任されている。児童の学業成績評価は 10 段階で行われ、6 に満たない者は落第となる。また、学業成績に加え、素行に対する評価も行われ、素行評価についても 6 以下は不合格点となる。

カリキュラム指針を基盤とした教育がなされているが、学校の裁量の幅が大きくなっている。

教科	一年生	二年生	三年生	四年生	五年生
国語	9	7	7	7	7
道徳	3	3	3	3	3
数学	6	6	6	6	6
科学	2	2	2	2	2
工学	1	1	1	1	1
外国語	2	2	3	3	3
美術	2	2	1	1	1
音楽	1	1	1	1	1
体育	1	1	1	1	1
宗教	2	2	2	2	2
合計	27	27	27	27	27

図 1 「一週間の時間割り」(27 時間)

音楽は週 1 時間、そして歴史／地理／道徳を総合して 3 時間となっている。日本の道徳にあたる授業は、イタリアでは「市民権と憲法」と呼び、本来の道徳教育に加えて環境教育、適法性教育、正しいスポーツ精神、ボランティア精神、保健教育、ルールを守る精神などを学んでいる。イタリアでは、音楽の授業は中学校では必修だが、小学校は必修ではなく、各学校の裁量に任されている。本学校では音楽活動の重要性を鑑み、音楽専科の教諭を置いている。

(3) ピステッリ小学校の音楽教育

音楽の授業では歴史、文化、基礎基本事項など、音楽全般の説明を行っている。階名の指導は行わない。また、発声・歌唱など音程を身に付けられるよう指導している。発声・歌唱など、指導法としては音を注意深く聴かせ、同じような音を出させる。音程を身につけられるよう指導している。

音楽専科の教諭が在籍し、年間計画等作成し、音楽の授業については一般の教員をリードしている。音楽の特定の力をつけたい場合は、各家庭でさまざまな楽器などの個人レッスンを受けるのである。

基本的なプログラムはあるが、指導は学校に任されており、各学校独自に行っている。本小学校では音楽室はない。多目的ホールにピアノが置いてあるため、使用する時もあるが、普通教室で行うことが多いのである。普通教室にピアノ等鍵盤楽器は置いていない。

本論で紹介する実践は小学校 2 年、3 年、5 年の事例であり、それぞれ、1 時間（時間設定はかなりアトラダムである）の記録によるものである。歌唱の指導支援に視点をおいて、内容、および特色を述べる。

(4) 指導の実際

① 小学校 2 年生 16 名 指導者 Cristina D'Amico

<基本的なリズム・発声・発音の指導>

- ・ICT 教材を活用し、イタリア語、スペイン語、英語の発音を映像と音楽に合わせて発音する。音楽を楽しみながら自由自在にそれぞれの国の単語を発音し、意味も理解させていく。「手拍子しながら発音しましょう」「リズムをしっかりとらえましょう」
- ・ICT 教材を活用し、初めに母音練習(AEIOU)を行う。発音の仕方の指導は特にない。
- ・スペイン語の歌を流し、母音を見分ける。「ぬいぐるみ」など単語を次々に発音し、スペイン語の歌を音楽に合わせて歌う。どんどん発音させる
- ・英語の単語の読み方、意味をあてさせながら、英語の歌と一緒に歌わせる。「りんご」など、単語を次々に発音させる。音符のルールを合わせて指導する。
- ・音楽の基本的な活動をはじめとし、母音の発音、イタリア語・スペイン語・英語の単語の発音をゲーム感覚で身につけさせていた。単語の意味にもおよび、バイリンガルの能力を自然に身につけさせている。

② 小学校 3 年生 21 名 指導者 Cristina D'Amico

<リズムと旋律>

- ・既習の曲を元気に楽しく歌う。「息をお腹から押し上げて声を出そう」といった指導を入れ、仲間と一緒に歌い合わせることを楽しませる。
- ・各国の歌を歌いながらリズムに合わせて、手拍子をいれるなど、様々な活動をいれる。

- ・「リズム練習」を行う。
- 3 グループに分け、基本のリズムを3パターン、交代で行ったり、同時に行ったりする。
- ・1 グループは基本リズムで机をたたき、2 グループは他のリズムで手拍子、3 グループは足をならす。
リズムを体得させ身体全体でリズムを感じ歌わせている
- ・グループごとに行う、2つのグループ、合同で行うなどリズムを体全体で感じとらせる。
- ・リズム遊びしながら歌を歌う。注意深く聴く耳を育てるため、集中して行わせている。
- ・「注意深く聴く」は、ゲーム感覚で行われる。クラス全員に目隠しさせ、聴くことに集中させる。
ゲーム感覚で児童1名が先生の方を向き、目隠し、普段とは違った声を発する。クラスの仲間が発した相手をあてる。裏声を出したり、動物の鳴きまねをし、あてられないようする。注意深く聴き、声の主を言い当てる。当たった人が、交代する。競い合って発言し、正解すると大きな拍手。
注意深く聴くことを楽しませながら取り組んでいた。こういった音を集中して聴かせるための遊びは授業の中で昔から行われている。

③ 学校5年生 23名 指導者 Rita・Shinibarudhi

- <オペラプロジェクト12)の一環である、歌唱指導>
- ・オペラプロジェクトでは、オペラの専門家が学校へ基本指導に2・3回訪れ、その後は、オペラの専門家の研修を受講した一般教員が、子どもたちの指導にあたる。
 - ・手作りのテキストはオペラの台本を子供用に書き換えてある。
 - ・歌唱練習では、リズム読みし、発音とリズムの練習から入る。
 - ・発声・歌唱の指導法としては音を注意深く聴かせ、同じような音を出させる。音程をしっかりと身に付けられるよう聴くことに集中させ指導している。
- <呼吸法にかかわる指導の言葉>
- ・「腹から押し上げる」
 - ・「息が正しいところを通るとよく響くよ」
 - ・「高音の直前の音で意識して息をたくさん使いましょう」
- <発声にかかわる指導の言葉>
- ・「どならない」
 - ・「高い音は、目と目、眉の間から声を出す」
 - ・「あごを軽く上げる」
 - ・「すべての母音を同じように同じ場所で発音する」
 - ・「顎に力を入れない。緩めたり動かしたりしてみよう」
 - ・「顎と口を楽にしよう」

5. 考察とまとめ

日本で学制が設置され、音楽が教科として成立したのは1900年である。⁽¹²⁾ ベル・カントオペラの隆盛など、音楽文化の歴史が深いイタリアで、公教育の音楽科教育

については、日本のわずか50年前からスタートしていた。学校で教える、というより、社会全体で音楽活動が充実・発展しているため、公教育において、すべての子供たちに、音楽科教育を行うことの必要性がなかったためであろうか。

歴史的に西欧の音楽文化の中心であったイタリアでは音楽科教育における歌唱指導に、どのように取り組んでいるのか。ベル・カント唱法の発祥地であるイタリアの音楽科教育に学び、日本の音楽教育への示唆を導き出すことを課題とした。

ベル・カント唱法は発声法の歴史におけるひとつの頂点とみなされている。この唱法はイタリアを発祥とし、各国に広がり影響を与えている。身体に余分な力が入っていない状態で腹式呼吸を行い、自然の生理に逆らわない発声法である。

この歌唱法を自分のものにするには、かなりの忍耐の期間が必要である。ピステリ国立学校の研究交流会において、音楽教諭から次のような説明があった。学校教育では、まだ年齢に達していないということで、基本的な発声指導は行っていない。声楽を専門として学ぼうとする者が、青年期に達してから専門的にレッスンを受け始めるというのが通例である、とのことである。しかしながら、実際には授業の中で随所に、年齢に応じた関わり方で呼吸法・発声法の基本を身に付けさせる指導が見られた。

このような歌唱法が声楽を専門とする者にはなく、公教育で、どのように引き継がれているのかを検証するために、ローマのピステリ国立学校において、調査研究を行ってきた。現地調査することができた内容を含め、音楽科教育における歌唱の指導法に焦点をあて、その実態を探り考察した。

本小学校では音楽専科の教諭が在籍し、年間計画等作成し、音楽の授業については一般の教員をリードしている。歌唱面では、教師の声、仲間の声、CDによる専門家の声など、特に低学年では注意深く「聴く」ことに力を入れ、良い声づくりとともに音感をつけようとしている。日本では「表現領域」において学年ごとに「共通教材」が提示されているが、イタリアでは、有名な歌曲やオペラの音楽など音楽的に重要な楽曲を使用し演奏活動や鑑賞活動に絡め、関連させながら学習を進めている。

発声指導においては、小学校中学年からは日本で行われているような指導法であり、本格的な発声法は年齢的に無理があるということで、行われていない。

しかしながら授業において、低学年ではリズムに合わせた発声・発音など、身体を使って自然に身に付けさせ、注意深く「聴く」ことに力を入れ、音程感覚を養うことを大切に指導支援にあたっている。中学年では「息を腹から押し上げる」「どならない」「高い音は目と目、眉の

間から声を出す」「注意深く聴き、同じような音を出す」というように、ベル・カント唱法に基づいた基本技能を高める声かけが随所に見られた。腹式呼吸を意識させる声かけ、母音の発音の仕方、高い声、低い声の発音の仕方などである。発展的な活動はクラブ活動や、個人レッスンで行うようになっていた。

ローマの公立小学校では、声楽専科の教諭は少ないが、脈々と受け継がれてきた歌唱法は生活環境の中で、一般教諭にも培われている面があり、子どもたちも同じことが言える。また、日常生活の中で、歌う環境があり、よく響く所で共鳴のメカニズムを体得している。

ベル・カントは美しく、自然に歌うということの基本である。昨今、様々なジャンルの歌があるが、そういった中で、一番正しく自然に美しく声を出すことは音楽教育上、大切なことであり、その基礎を初等科教育で系統的に指導することはさらに重要であると考えられる。

日本の住環境においては自然に体得するのは難しいのではないかと、いうことは容易に考えられる。だからこそ、自然な呼吸法・発声法を小学校の段階から、学年の成長に応じて指導し、身につけさせることは意義があると考えられる。

現在、日本においては音楽教育環境が豊かになっており、歌唱・合唱のレベルも上がってきている。低学年のうちから少しずつベル・カント唱法に基づいた基本技能を身に付けさせていくことは、一般の多くの子ども達に、生涯にわたって、より音楽表現を豊かにし、楽しんでいく素地をつくることにつながると考えられる。

脈々と受け継がれている音楽文化に満たされているイタリアではあるが、現在の音楽教育環境は決して良いとはいえない。小学校では音楽の専門の資格を持つ者が必ずしも在籍するわけではなく、一般の教員が音楽指導する。大学の教職のカリキュラムにも音楽は含まれていないことが多い。

音楽を学習する場所として音楽室やピアノの設置状況など、日本に比べると学習環境は良いとは言えない。しかし、その中でコンピュータ活用等、工夫しながら授業展開している。日本では小学校の音楽は必修であり、専科の教師は十分ではないが配置はある（学校規模・地域差はある）。また、施設・設備面でも恵まれている面がある。そういった意味で、与えられている学習環境を十二分に生かし、より音楽活動を豊かなものにしたいためである。

歴史的に音楽文化の中心であり、コンセルバトワールなど充実しており、学校教育での目的は音楽そのものを教育することではなく、なってきたのであろうか。しかしながら、4年間の研究交流の中で、実状は音楽をより多く学ぶことができるのは、一部の子どもたちであり、一般的には学校や地域で音楽活動を楽しんでおり、親た

ちは音楽の基礎基本教育を、すべての子どもたちに公教育で行ってほしいという思いがあると言えるのである。これまでに実施した、アンケート調査・聞き取り調査から⁽¹³⁾ そのようなことがうかがえる。

Profess Brunella Maiolini（校長）によると、数年前と比べて音楽の授業の大切さが再重要視される傾向にあり、年に数回課外授業としてコンサートを聴きに行ったり、学校にオーケストラを招いたりもしているということであり、音楽を教育全体のなかで、大事にしていかなければという願いがある。

欧米における歌唱の質や特性はこの百年間ですっかり変わってしまっている。その大きな変化は20世紀初頭から半ばにかけてのクラシック声楽のレコードを聴けば、古いレコーディング技術のノイズにもかかわらず、その基軸の部分が今日よりヒステリー的でない、優しく、穏やかであった歌唱を聴くことができるのである。この優しさは、ピアノシモからフォルティッシモへの完全なダイナミックレンジやレガートからスタッカートまで、全ての音楽表現のなかで不変のものである。

一般にオペラだけでなく、声楽曲の歌唱法ではベル・カント唱法が最もそれにふさわしいものと考えられている所以である。

イタリア人にとってのベル・カントの定義は、人それぞれの感性があり、必ずしも統一されたものではないが、共通していることは、極めて柔らかく、そして響きが極めて丸いということであった。

声楽を専門的に学ぶ時期は、一般的に声変わりを終えた頃とされてきたが、呼吸法や発声法の基本的なメカニズムの修得は長い年月を要することから、小学校低学年から、成長に応じて、導入することは可能であり、それぞれの子供たちの楽器（声帯）の可能性を広げていくことにつながる。特に、日本の響きに適していない環境で生活している子ども達にとっては、有意義なことであると考えられる。

日本の秩序だった音楽科教育は、今や世界にはこるレベルに達していると言えよう。歌唱・合唱においても年々水準を上げてきている。

新学習指導要領における音楽科では、「指導計画の作成と内容の取扱い」の中で、歌唱教材について、我が国及び諸外国の様々な音楽を扱うことや、民謡、長唄などの我が国の伝統的な歌唱のうち、生徒や学校、地域の実態を考慮して、伝統的な声や歌い方の特徴を感じ取れるものも扱うという記述がある。多様な表現活動の体験を促しているのである。そういった中で、すべての人間が生まれつき持っている能力を生かし、声を発する様々な表現活動の基礎づくりにつながる呼吸法・発声法を音楽科教育で行っていくことは意義あることと言えよう。

イタリアで引き継がれてきた呼吸法・発声法に示唆を

導き出し、すべての人間に与えられた歌声という楽器作り、楽器磨きのために、日本で不足している面を補い、日本の子どもに適した形で取り入れた新しい教育方法の開発を今後の課題とする。

これらの実践研究から、教育改革が進められている中で、創造性とイノベーションを育む音楽科カリキュラムの開発を支援していきたいと考える。

<引用・参考文献>

- (1) 瀧明知恵子「イタリアの学校音楽科教育に学ぶⅠ～歌唱活動に注目して～」『教育フォーラム 56号特集<アクティブラーニングとは何か>』金子書房 2015
瀧明知恵子「イタリアの学校音楽科教育に学ぶⅡ～創造性・主体性の育みを視点として～」『教育フォーラム 58号特集<主体的能動的な学習—アクティブラーニングの精神を生かす>』金子書房 2016
瀧明知恵子「イタリアの音楽科教育におけるカリキュラムと実践における—考察」『奈良学園大学人間教育学会誌』 2017
 - (2) 大野内 愛「イタリアの小・中学校における音楽科教育の変遷 —1894年から現在までのプログラムに着目して—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第2部 第61号 2012 333-342
・大野内 愛「1920年代のイタリアにおける小学校唱歌教育の特質—「1923年のプログラム」と小学校唱歌指導者(1924)の分析をとおして—」『音楽表現学』vol.9 日本音楽表現学会 2011
・高橋春菜「イタリア公教育における学校外教育の位置付けの変容—1985年版と2012年版国の指針の内容分析からEUの影響に着目して—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第63週・第1号(2014)
 - (3) 出典: Ministero dell' Istruzione, 省令 29号3条, March 5, 2004.
Ministero dell' Istruzione Website,
<http://www.istruzione.it/> より訳出
 - (4) 『幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針』 2012年9月版 教育省
 - (5) 同上
 - (6) カーティス・プライス「西洋の音楽と社会③オペラの誕生と教会音楽」
監訳者 美山良夫 発行者 浅香 淳
音楽之友社 1996 p25
 - (7) フレデリック・フースラー, イヴォンヌ・ロッド＝マーリング＝著「Singen」
須永義雄, 大熊文子＝訳 1991 音楽之友社
 - (8) コーネリウス・L.リード「バル・カント唱法—その原理と実践」渡部 東吾(翻訳) 音楽之友社 1986
 - (9) フレデリック・フースラー, イヴォンヌ・ロッド＝マーリング＝著「Singen」須永義雄, 大熊文子＝訳 1991 音楽之友社 p108
 - (10) Libero Canto—「ラヨシュ・サモシの歌唱法と教授法 Libero Canto」
<http://www.liberocanto.org> 参照
 - (11) 長谷川 敏「Libero Canto—ラヨシュ・サモシの歌唱法と教授法」茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学, 芸術) 56号(2007)
 - (12) 上原一馬 「日本文化史」(音楽取調掛『小学唱歌歌集初編』) 音楽之友社 P189
 - (13) 瀧明知恵子「イタリアの学校音楽科教育に学ぶⅡ～創造性・主体性の育みを視点として～」『教育フォーラム 58号特集<主体的能動的な学習—アクティブラーニングの精神を生かす>』金子書房 2016
- * 図 1, Scuola Primaria "Ermenegildo Pistelli"
『Piani di Offers Formative Scuola Primaria "Ermenegildo Pistelli" 』(「育成提供プラン」)
p.3, 2014
- * 外務省『諸外国・地域の学校情報 国・地域の詳細情報』(平成 28年1月更新情報)
- * Wikipedia イタリアの学校制度
(最終更新 2017年4月13日)
- * 文部科学省『中学校学習指導要領(平成 29年告示)解説 音楽編』2018